

ペレルマンのレトリック論

——「普遍的聴衆」論の再検討——

氏川 雅典

ペレルマンの「新しいレトリック」は社会科学におけるレトリック分析に大きな影響をあたえた。しかし、社会学においては、その意義が十分に認識されているとは言い難い。

本論文の目的は、ペレルマンの「新しいレトリック」を特徴づける「普遍的聴衆」の意義を明らかにすることである。ペレルマンが想定する社会観をふまえることで、普遍的聴衆が有する、多元論的社会における議論の〈作法〉としての側面が明らかになる。これにより、ペレルマンの「普遍的聴衆」は、G・H・ミードの「一般化された他者」やR・H・ブラウンの「アイロニー的態度」などの議論と類似性を持つことが判明する。

1 なぜペレルマンか

Chaim Perelman (1912 - 1984) [以下ペレルマン]はベルギーの法哲学者であり、その著書『新しいレトリック——議論法の研究』(1958) [オルブレクツ-テュテカ夫人との共著]により、現代においてレトリックを復権させた人物である。

ペレルマンのレトリック論は、一般に「新しいレトリック」と総称される。その特徴は修辞学ではなく、弁論術(説得的言論の技術)としてのレトリックに再び光を当てたことにある。古代ギリシャにおいて、法廷、議会、祭礼の場における説得的言論の技術としてのレトリックは、アリストテレスによる体系化を経て、キケロの時代までに(1)発想、(2)配置、(3)修辞、(4)記憶、(5)発表の五部門へと分類された。その後、中世、近世においてレトリックの意味は「修辞」に限定されることになり、文学・文芸批評などの一部の分野を除いては学

問分野において考察の対象となることはなかった。このような修辞学としてのレトリックに対し、ペレルマンは日常生活における人々の理由付け活動を解明するための方法として、弁論術(説得的言論の技術)としてのレトリックを再発見した。

ペレルマンの「新しいレトリック」は、法学におけるレトリック論の復権への貢献をはじめ、アメリカにおけるスピーチ・コミュニケーション研究、さらには1980年代に登場した人間・社会科学などの学問分野におけるレトリックの働きを解明しようとする「探究のレトリック Rhetoric of Inquiry」などにも大きな影響を与えている¹。

ペレルマンの「新しいレトリック」は、様々な分野に大きな影響力を残しており、それは現代においてレトリックを論ずる際に無視することはできない存在、いわば現代の古典として位置づけられるだろう。その理論的可能性の解明は現在進行形で展開中である²。

これに対し、社会学における一般的なペレルマン理解は、未だに一面的なものに留まっているといわざるを得ない。つまり、ペレルマンの理論的可能性を展開しようという段階にまで至っておらず、その「新しさ」も十分に認識されていないというのが現状である。

なぜペレルマンの「新しさ」が認識されないのか。その一因は、社会学におけるレトリック分析が自らを位置づける系譜にある。

1980年代以降、社会学においてレトリックを分析方法として用いる諸研究が登場する³。例えば、社会学的著作のレトリック分析(Brown 1977; Edmondson 1984; Atkinson 1990)、社会運動における人々のクレーム申し立て活動のレトリック分析(ベスト)などである。しかし、いずれもテキストの中の文彩や論証などのレトリックを発見、分類する静態的な分析に留まっている。

静態的分析の原因は、レトリックを、説得の際に用いられる「文彩・論拠」の研究として捉え、この「文彩・論拠」研究の系譜の延長線上に、社会学におけるレトリック分析を位置づけようとする点にある。

このようなレトリックを「文彩・論法」研究として捉える発想法の下では、ペレルマンの「新しいレトリック」も、その中の文彩・論法研究に主に焦点が当てられることになる⁴。

確かにペレルマンは、文彩・論法について論じており、このような捉え方は間違いではない。しかし、ペレルマン理解としては一面的である。なぜなら、文彩・論法研究の系譜に位置づけることで、ペレルマンの「新しさ」を問はず契機が予め閉ざされるからである。

「新しさ」を対象化しないということは、すなわち「レトリック」(この場合、文彩・論法)という道具立てのみに焦点を当てるとということ

であり、この場合、その道具に新しい機能を付与する地平が考慮されることはない。「一面的」といったのは、この地平を明らかにした上でのペレルマン理解ではないからである。

よって本稿では、ペレルマンの「新しいレトリック」が前提とする地平、すなわち彼の知識観や社会観を把握することを通じて、その「新しさ」を明らかにする。具体的に言えば、ペレルマンの「新しいレトリック」の新しさの特徴づける「聴衆」、特に「普遍的聴衆」の意義を、その社会学的側面——ペレルマンの聴衆概念が含意するコミュニケーション形態や、ペレルマンが想定する社会観——に着目して明らかにするのである。

本稿の流れは次の通りである。まず、ペレルマンの「新しいレトリック」において「聴衆」が重要であることと、それが聴衆論の中で占める位置を確認する。次いでペレルマンが前提とする社会観を明らかにすることを通じて、普遍的聴衆についての本稿なりの解釈を示す。最後に本稿の知見と他の社会学理論との関連を示し、結論とする。

2 聴衆論の中の「新しいレトリック」

2-1 「新しいレトリック」と聴衆

ペレルマンは1912年にポーランドに生まれた。その後ベルギーに移り住み、ブリュッセル自由大学へと進学した。そこで社会学者デュプレール(Eugène Dupréel 1879-1967)に師事、1934年に法学、1938年には哲学の学位を取得している⁵。

法学者ペレルマンは、その学問的営みを「正義」に関する考察からスタートした。『正義論』(1945)は、論理実証主義的観点から正義について考察したものである⁶。しかし、次第に正

義などの価値に対して、論理実証主義的にアプローチすることの限界に思い至り、日常生活において人々が価値をめぐる論争する際に働く論理の解明、すなわち「価値判断の論理学」の構想に着手した。

1947年ごろからペレルマンはオルブレクツ＝テュテカ夫人の協力を得て、「価値判断の論理学」に関する共同研究を開始する⁷。その成果が1958年に出版された『新しいレトリック——議論法の研究』である。ペレルマンらは事の優劣を判断する論理を解明するために、法律家、政治家、哲学者、ジャーナリスト、文学者などの、あらゆる種類の言論を渉猟した後に、次の結論に至った。「価値判断特有の論理学は存在しない、しかし、現在は忘れられ軽蔑されているあの古い学問、すなわち説得説伏の術としてのレトリックに、われわれが求めるものがすでに展開されている。……ことの優劣、適否、理の有無に関する推論は、形式的に妥当な演繹でも、個別から普遍へ向かう帰納でもなく、ある主張への人びとの同意を求めてなされるあらゆる種類の議論そのものだ」(Perelman 1977=1980: 12-3)。

「新しいレトリック」とは、日常生活における非形式的論理 (informal logic)、議論法に関する一般理論に他ならない。それは「デカルト的合理主義、形式論理の教義、現代数学の手続きが効果を発揮しないことが明らかである人間の活動領域における、意思決定のための合理的な基盤を探究する」(Gross and Dearn 2003: 13-4) 試みであるといえる。

この「新しいレトリック」は2つの論点、すなわち、①聴衆などの議論を行うための背景や前提条件についての分析と、②議論の構造分析から構成されている。

日本のペレルマン研究では、おもに上述の

②、つまり彼の「新しいレトリック」論のなかでも「議論の構造分析」に焦点を当てたものが多く、それも法学の分野においてなされている。ペレルマンの著作の訳者であり、比較的早い時期からペレルマンの議論を日本に紹介した三輪(1974, 1982)が、哲学の立場から、「新しいレトリック」論のなかにある「各人の自由な主体性の尊重」というメッセージを読み取りつつ、包括的な紹介を行っている以外、主なペレルマン研究は法哲学者によるものである⁸。

法哲学者としてペレルマンを描き出すこと、すなわち、彼の「新しいレトリック」論のなかでも「議論の構造分析」に焦点をあて、それを他の法理論のなかに位置づけるという「法学アプローチ」は、ペレルマン自身が法哲学者であったことを思えば、ある意味で正統的な解釈であるといえる。しかしペレルマンを、法学者たちから構成される学問ネットワークの中でのみ位置づけるのは、あまりにも一面的な理解であるといえよう。

なぜなら、このモデルが自明になると、①の論点が考察の対象から排除され、さらにはペレルマンの議論が、法哲学だけではなく、レトリックに関心を持つ様々な分野に与えた影響も不問にされてしまうという問題点を有するからである。

「新しいレトリック」において聴衆は重要である。それは命名の由来からもうかがい知ることができる。はじめ「新しい弁証法 the new dialectic」と「新しいレトリック」の二つが候補に挙がった。弁証法は、ヘーゲル、マルクス概念として認知されているので混乱を招く。これに対しレトリックは聴衆に関心を払ってきた唯一の学問分野である。よって「新しいレトリック」が名前として採用されたのである (Foss et al 2002: 85; Gross and Dearn 2003: 8)。

つまり、ペレルマンの「新しいレトリック」は、「聴衆」によって特徴づけられるとよい。ゆえに、その「新しさ」を理解することは、「聴衆」を理解することに他ならない。その際、ペレルマン独自の概念である「普遍的聴衆」を理解することが、特に重要となる。なぜなら、命名の由来からもわかるように「新しいレトリック」において聴衆は重要な位置を占めるが、その中でも普遍的聴衆は、その解釈をめぐる様々な議論がなされてきた概念だからである。ペレルマンの「新しいレトリック」の新しさの理解は、普遍的聴衆の理解にかかっている、といっても過言ではない。

よって、日本において主流を占める「法学アプローチ」に対し、本稿ではペレルマンの「新しいレトリック」における「聴衆」（特に普遍的聴衆）に着目し、その意義を明らかにする。この目的を達成するために本稿は、社会学的側面から「聴衆」へアプローチする。すなわち、「聴衆」概念が含意する、コミュニケーション形態や社会観を把握した上で、聴衆、特に普遍的聴衆の意義の解明を試みるのである。

以下、少々遠回りではあるが、レトリック論における聴衆論の系譜を概観し、その中におけるペレルマンの位置づけを確認しておく。聴衆論の変遷の見取り図から、ペレルマンの聴衆概念を論じる際の視点を取り出すことが、狙いである。

2-2 聴衆論の変遷

聴衆とは、一般に語り手（書き手）の話や文章が向けられる相手を指す。しかし、これは大雑把で抽象的な定義に過ぎない。類似概念として、読者、受け手、解読者、使用者、消費者、コミュニティ、フォーラムなどがあり、その内容も文体、問いや論証の型、性格類型、テクス

ト的虚構、ジャンル、言説共同体と様々である（Porter 1992）⁹。聴衆に関しては確定的な定義が存在しないというのが現状であるといってい

では、これまでレトリック論において聴衆は、どのように概念化されてきたのか。その聴衆論の系譜のどこにペレルマンは位置づけられるのか。

Porter の『Audience and Rhetoric』（1992）は、この問いに答えるための格好の見取り図を提供してくれる¹¹。Porter のこの著作は、古代ギリシャから現代に到るまで、レトリック論において聴衆がどのように概念化され、それがいかなる変遷をたどったのかを網羅した、レトリック論においては数少ない、聴衆論に焦点をあてた学説史研究である¹²。

Porter によれば、レトリック論における聴衆概念は、「受け手」から「共同体」へと変遷してきた。すなわち、「送り手／受け手」図式に基づき、聴衆をメッセージの受動的な受け手として捉える立場から、議論やメッセージが「そこ」から引き出され、語られたものが再び「そこ」へと立ち返り、ストックされるような「共同体」として聴衆を捉える立場への移行である。

このように聴衆を、議論の受け手ではなく、議論が生み出される条件、すなわち共同体として概念化する契機の一つが、聴衆を、彼／彼女らが有する知識に着目して概念化したペレルマンの「新しいレトリック」なのである。以下、簡単に聴衆論の変遷を概観する。

アリストテレス（B.C.384-322）とキャンベル（George Campbell 1719-1796）こそが、レトリック論における聴衆に関する我々の思考を制限している、と Porter は主張する。

アリストテレスは、その著書『弁論術』にお

いて、レトリックの体系化を図った人物である。しかし、その功績とともに、後続するレトリックに関する議論——特に聴衆——の枠組を設定した責任も彼に帰属する。その枠組とは「聴衆を語り手 (rhetor) により発見された意味を受動的に受け取る存在として位置付けた」(Porter 1992: 15) ことである。

アリストテレスのレトリックとは、法廷、議会、式典などの公的な場において、そこに集まった人々を説得するための弁論の技術である。この場合、聴衆とは特定の場所に集まった具体的な人々を指す。レトリックにとって聴衆は重要である。なぜなら語り手の目的は公の場に集まった聴衆を説得することであり、説得的に語るために「語り手は、聞き手の性格や気質に見合う語りを生み出す発見的諸戦略を注意深く選ばねばならない」(Porter 1992: 16) からである¹³。しかし、レトリックが用いられる公の場における弁論においては、聴衆はコミュニケーションの参加者ではなく、単なる語り手が発したメッセージの受動的な受け手に過ぎない¹⁴。

すなわち「レトリック的状况には、多かれ少なかれ『真理』を有した知識人としての語り手と無知な聴衆が含まれる。もちろんそのような状況においては、語り手は聴衆から学ぶことは何もない。ただ聴衆からよりよい反応を引き出すために、聴衆について学ぶだけである。この視点において、語り手は知識を探究する特権的存在であり、真理はレトリック的行為つまり聴衆との共同に先立って、(ディアレクティックまたは科学的方法により) 獲得される」(Porter 1992: 18)。

このような聴衆を受動的な受信者としてのみ位置づけ、もっぱら語り手のみを扱う傾向は、時代の推移に伴いレトリックが弁論術から修辞学へと変容していく過程で、ますます強くなる。

レトリックの内実は、書き手が用いる文彩・論法の研究となり、聴衆は次第に省みられなくなった。

16世紀のフランスの人文学者、ピーター・ラムス (Peter Ramus) とオメール・タロン (Omer Talon) は、レトリックを文体修飾の研究として定義した。これにより「構想」部門 (議論の主題の発見と、それに適した論法を扱った研究) がレトリックから排除され、それに伴い聴衆も意義を失う。なぜなら、主題や論法の選択は、上述したように、語り手がいかなる種類の聴衆に向けて語りかけるかによって異なるからである。

このようなラムスらの、レトリック=修辞学と捉える考えは、その後のレトリック論の方向性を決定付けた。スコットランドの修辞学者 G・キャンベルは、その著書『レトリックの哲学』(1776) において、聴衆を受動的な受信者として位置づけ、さらには文体の問題へと還元した。すなわち、キャンベルにとってレトリックとは、それに先立って存在する知識や真理を、聴衆に向けて効果的に語る技法であり、「語り手は、望ましい効果をもたらす言説を生み出す一番よい方法を判断するために、聴衆のことを考える」(Porter 1992: 32) とされた。キャンベルよれば、聴衆は幾つかの心理状態をもっており、書き手は各種の心理状態に適合的な文体を選択しさえすればよいのである¹⁵。

このようにして聴衆は、レトリックから次第にその姿を消していった¹⁶。

しかし、1960～80年代にかけて、アメリカのレトリック及び作文研究の分野において登場した「新しいレトリック」と呼ばれる知的動向において聴衆は復権する。

この「新しいレトリック」の担い手とされたのが、Kenneth Burke、I. A. Richards、Richard

Weaver、そして Chaim Perelman である (Porter 1992: 52; Gross and Dearin 2003: 10)。「新しいレトリック」は、文彩、文体研究に特化した修辞学としてのレトリックを批判し、当時の哲学、心理学、言語学、文芸批評などの成果を取り込みながら、レトリックの概念を拡大しようとした。このことはレトリックを、文体研究としてではなく、ある場で相手を説得するコミュニケーション的行為として再定義することを意味する。ここで「聴衆」が再び重要な要素として浮上する。新しいレトリックは、文体研究において消滅していた聴衆を復権させたのである。

ペレルマンは「レトリックは聴衆を無視できない。なぜなら、聴衆はあらゆる議論がそこから出発しなければならぬ基本的前提を提供するからである」(Porter 1992: 54)として、聴衆を彼／彼女らが有する知識の観点から概念化した。

このようなペレルマンの聴衆の概念化は、その後、クーンのパラダイム、フィッシュの解釈共同体、フーコーの言説編成などの議論をふまえ聴衆概念の再構成を試みる「共同体としての聴衆 audience as community」と Porter が総称する諸研究へとつながってゆく¹⁷。

「共同体としての聴衆」とは、次のような主張である。語り手 (rhetor) の話や文章は独創的なものではない。語り手が所属する様々な共同体 (community) にあるテキスト群から引用しているのであり、これらの共同体における言説の編成が語り手を形成するのである。この語り手と聴衆 (共同体) の相互作用モデルにおいて、真理や知識は局所的、偶有的、つまり常に社会的、文脈的なレトリックを通じて形成されるものとなる (Porter 1992)。

これまでの議論をまとめよう。Porter によれば聴衆論の変遷は「受け手→共同体」として描

き出される。それは議論の受け手から、議論が生み出される基盤として聴衆を捉えようとする転換である。そして、この転換の契機となった先駆的研究の一つが、聴衆を人々が有する知識の観点から概念化したペレルマンの「新しいレトリック」であった。

ただし Porter は、ペレルマンの議論は過渡的なもの、やがては「共同体としての聴衆」に取って代わられるものとして位置づけている。例えば、ペレルマンの普遍的聴衆は、その抽象的な性質から、聴衆を文体へと還元したキャンベルの議論に近いものと評価される (Porter 1992: 55)。

しかし、このようなペレルマン理解は性急で、一面的にすぎる。これに対し本稿は、次節において、ペレルマンの社会観を把握することにより、Porter が論じなかった点、すなわちペレルマンの普遍的聴衆は、議論の〈作法〉としての側面を持つことを明らかにする。

3 普遍的聴衆

3-1 ペレルマンの「聴衆」

Porter は、聴衆論の変遷を「受け手→共同体」として描き出した。この聴衆の概念化の転換は、各論者が想定するコミュニケーション形態の転換でもあることに注意しよう。すなわち、送り手から受け手へと一方向にメッセージが流れるというモデルから、メッセージの流れが再帰的で、重層的なコミュニケーション形態への転換である。すなわち、前者においてレトリックは伝達手段であり、聴衆は受け手として意味生産過程から排除されている。後者の場合、聴衆はコミュニケーションの参加者であり、レトリックは意味生産の方法として位置づけられる¹⁸。

アリストテレスは公の場に集まった具体的な

人々として、キャンベルは文体規則として聴衆を概念化することで、単線的なコミュニケーション形態を想定していた。ではペレルマンは、いかなる諸要素との関係で聴衆を定義し、それにより、どのようなコミュニケーション形態を描き出したのか。

議論とは「ある主張への聞き手の同感を喚起または増大させることによりその主張に対する聞き手の賛成を求めること」(Perelman 1977=1980: 32)であり、その際の聞き手すなわち聴衆とは「話し手がその議論によって影響を与えようとする人々の集合」(Perelman 1977=1980: 37)と定義される。しかし、これでは単なる言論が向けられた相手という程度の意味しか持っていない。さらにこの聴衆が、いかなる諸概念の関係の中に位置づけられているか見ていく必要がある。

ペレルマンは、語り手が聴衆に影響を与えよう、言論を効果的にしようとする場合、「話し手は聞き手に順応しなければならぬ」と言う。これはつまり「話し手は話しかけようとする相手が抱いている考え方しか議論展開の出発点に選ぶことができない」ということを意味する(Perelman 1977=1980: 46)。

相手が抱いている考え方を、ペレルマンは「信仰信念の総体」または「全体的な世界観」などとも呼んでいる(Perelman 1977=1980: 63)。これは社会学の文脈でいうならば、人々が有する「知識の社会的在庫」(バーガー=ルックマン)に相当するものであるといえる¹⁹。バーガーらの知識の社会的在庫とは、もののやり方である処理的知識の体系であり、それは現実を「親しまれた領域」と「疎遠な領域」とに区別する役割を果たしている(Berger and Luckman 1967=1977: 76)。よって、語り手は聴衆にとって親しまれた領域の中から議論の前提を選択

しなければならない。

ペレルマンによれば、聴衆が有する信仰信念の総体(≒知識の社会的在庫)は、次の諸概念から構成される。实在(reality)に関する事実(fact)、真理(truth)、推定(presumption)と、好き嫌い(preferable)に関わる、価値(value)、優劣順位(hierarchies)、選好論拠(loci of the preferable)などである(Perelman 1977=1980: 49)²⁰。

ここで、これらの事実や真理、価値や優劣順位などは、実際に信仰信念の総体を構成する実体的なものではない、ということに注意しよう。これらの「事実」や「価値」は機能的カテゴリーであり、信仰信念の総体を仕切る「格子」として譬えられよう。

ペレルマンは「事実」や「価値」などを、それらが「議論においていかなる機能を果たすか」という点から定義している。各言明は、議論において果たす役割に応じて分類され、「事実」や「価値」などのカテゴリーに振り分けられる。これは言い換えるならば、同一の言明が、どのカテゴリーに振り分けられるかに応じて、すなわち議論において占める位置に応じて、その機能が変化するということである。

例えば、ある言明が「事実」のカテゴリーに分類された場合、その言明は、それ以後、何か不都合が生じるまでは、「疑いを保留されたもの」となり、議論の前提として機能する。しかし「何らかの事実ないし真理も一たび聞き手から疑念を抱かれれば、聞き手がその点では間違っていることを立証しないかぎり、……話し手はその事実ないし真理に頼りつづけることはもはやできないのである」(Perelman 1977=1980: 50)。言い換えれば、「事実」として承認されている、ある言明がもつ「疑いを保留されたもの」つまり「与えられたものという性質も、そのも

の解釈をめぐる何らかの議論の結果であり、さらに言えばそのものの叙述に使われる言葉の意味と適用範囲をめぐる何らかの議論の結果に他ならない」(Perelman 1977=1980: 83) のである。

場合によっては、ある言明を「事実」のカテゴリーに分類するか、しないかで意見の対立が生じる。さらにいえば、「事実」は、何らかの価値言明を伴って表明されるので、ある事実がいかなる「価値」に分類されるのかをめぐっても意見対立、論争が生じる²¹。すなわち、信仰信念の総体における諸言明は、すべて明確に各カテゴリーに分類されているのではなく、どっちつかずの、カテゴリー間の境界線を揺れ動くものもある。よって「議論にはそれに先立って選択がある」(Perelman 1977=1980: 63)。

では、ある言明を採択したり、却下したりする基準、ある言明を「事実」に分類したり、しなかったりする際の基準はいかなるものであるのか。それは、ペレルマンは明示的に述べていないが、プラグマティックな基準である。「人は双方の議論をつき合わせ、当面の問題に対する双方の解決能力を評価することによって、競合する主張のいずれかに同意するのである」(Perelman 1977=1980: 83)。すなわち「その選択が、結果として何をもたらすのか」という判断基準が選択の際には働いているのである。あくまで知識とは、状況に対応し、問題を解決するための道具であり、議論とは、状況に適応しない知識を、改良する手段である、とする発想がここには見られる。

よって議論の結果、各言明は各カテゴリーに分類され、以後の議論の前提として使用されるが、常に批判、改定の余地を残している。「必然的明証的な第一真理をわれわれの全知識がそれにかかるものとして追求することは止めよ

う。人間の文化と制度と未来との唯一の責任者は人間であり、人間とその社会との相互作用であるとの観点から、われわれの哲学を考え直し、不完全だが徐々に完全にしていくことのできる理性的体系として作り上げることに努めよう」(Perelman 1977=1980: 228)。

まとめると、ペレルマンは聴衆が有する知識に注目し、議論を次のような過程として描き出しているといえよう。すなわち人々は、ある問題をめぐって、信仰信念の総体(≒知識の社会的在庫)に基づき議論を組み立て、プラグマティックな選択を行い、信仰信念の総体を組み替えることで、その解決を図ろうとする。

「新しいレトリック」の大半は、議論の構造分析に費やされるが、ペレルマンは、「新しいレトリック」は「知識社会学者に対し広大な研究領域を提供する」(Perelman [1959] 1963: 155) と述べている²²。つまり「知識として通用するものは、ある領域(milieu)における集団の同意に基づく社会学的構築物である」(Gross and Dearin 2003: 17) ということを認識していたといえよう。

議論とは、このような問題解決をめぐる社会的実践に他ならない。議論を行うとは、この社会的実践に参加することであり、聴衆は単なる受け手ではなく、意味生産の担い手である。ここで想定されるコミュニケーション形態は、単線的なものではなく、再帰的で重層的なものである。

3-2 普遍的聴衆

さらにペレルマンは議論を、それが向けられた聴衆の性質に応じて「説得的 persuasive」議論と「確証的 convincing」議論とに区別する。説得的議論とは、特定の価値や信念をもった人々からなる特殊聴衆(particular audience)

を相手にした議論である。確証的議論とは、普遍的聴衆 (universal audience)、すなわち特定の価値や信念から自由な「理性がある人びと」(Perelman 1977=1980: 38) から構成される集団に向けられた議論である。

問題は、なぜペレルマンが説得と確証という区別を導入したのか、言い換えれば、なぜ具体的な価値や信念を有する特殊の聴衆のほかに、理性を有する人々からなる普遍的聴衆を、自らの議論の理論の中に組み込んだのかということである²³。

普遍的聴衆は、レトリック研究者たちの間では、ペレルマンの議論において中心的な概念の一つであるが (Golden 1986: 287)、ペレルマン自身は断片的な言及しかしておらず、その評価をめぐっては、様々な議論がなされてきた概念でもある。

ここでは、まず普遍的聴衆に関する断片的な記述を整理しておこう。

(a) 普遍的聴衆は、話し手の議論を理解できる能力をもち、「特定集団の信念や欲望を超越しようとする」(Perelman 1984: 192)、理性を持った人々から構成される²⁴。

(b) 「普遍的聴衆は決して実際には存在しない。それは理念的聴衆であり、語り手の構築物なのである。『普遍的聴衆』は時代や人により変化する。すなわち、人々は各々独自の普遍的聴衆を構成するのである。この事実は知識社会学への関心を説明する」(Perelman [1951]1963: 155)。そして、語り手が普遍的聴衆を構成する際、語り手自身も、その普遍的聴衆の一員として含まれる (Perelman 1984: 194)。

(c) 語り手が議論の出発点として選択することのできる「実在 (事実、真理、推定)」は、普遍的聴衆の同意を獲得したと見なされている

ものである (Perelman 1977=1980: 49)。

(d) 限られた人々に向けられた議論は説得を目指すものであり、理性を備えるすべての人、普遍的聴衆に向けられた議論は確証を目指す。言い換えれば「確証を試みる語り手は、理性を備えた人々が、理に適ったものとして受け入れる議論を構成するのに対し、説得を試みるものは、特定の対象に関心を持つ特殊の聴衆の支持を取り付けた議論で満足する」(Golden 1986: 290)。つまり「確証的議論はその前提と議論とが普遍化可能な言論であり、原理上普遍的聴衆の全成員によって受け入れられるべき言論である」(Perelman 1977=1980: 42)。

(e) 「哲学者の言論は原理的に言って、あらゆる人すなわち普遍的聴衆を相手にする」(Perelman 1977=1980: 40)。

以上がペレルマンの普遍的聴衆に関する記述である。これらの記述を本稿なりに総合してみるならば、「語り手 (特に哲学者) は、事実や真理に関する議論を行う場合、理性を備える人々からなる普遍的聴衆を構成し、それらの人々の同意を獲得する確証的議論を展開しなければならない」ということになるだろう。

このような普遍的聴衆に関して、「普遍的」という概念をどのように解釈するかによって、すなわち、いかなる諸概念と関連づけるかによって各論者の評価は異なる。既存の普遍的聴衆に関する論考は、大まかに言って、普遍的聴衆を、(i) 哲学とレトリックを架橋する概念として位置づける Ray (1978)、Ede ([1981] 1989) らの立場と、(ii) 実践哲学の文脈において理解する Scult ([1976] 1989)、Eubanks (1986) らの立場に分けられる。

(i) の立場は、プラトン以来の哲学とレトリックの断絶——「レトリックが競い合う意見の中である意見を他の意見より優越させようと

するものであるのに対し、もともと個別科学を包括すべきものである哲学は超個人的普遍的真理を追求しようとした」(Perelman 1977=1980: 219) ——を架橋するものとして普遍的聴衆を位置づけようとする。すなわち、この立場は、哲学者は臆見ではなく、普遍的な事実や真理について語るのであり、普遍的聴衆は、そのような哲学者の言説の正当性を保証するものとみなされている。

例えば、Ede ([1981] 1989) は、ペレルマンが論理実証主義から学問的キャリアをスタートさせた点に着目し、普遍的聴衆概念を伝統的な合理主義的思考の残滓と見なす。Edeによれば、ペレルマンは伝統的な哲学とレトリックとの断絶を「倫理的、認識論的に妥当な議論の理論を生み出す手段としてのレトリックの過程を見るのではなく、ペレルマンは、仮説的構築物すなわち普遍的聴衆により、これらの条件を外挿しようとする。確かに、普遍的聴衆の記述において、ペレルマンは科学的・数学的知と結びついた形式的妥当性を自身の主張に与えようと試みているように思える」(Ede [1981] 1989: 147-8)。

(ii) の立場は「賢慮もしくは『実践知』の復権が、ペレルマンの研究生活の根本的な目標であり、主要な業績である」(Eubanks 1986: 69) として、道徳、社会 - 政治領域における問題解決、意志決定の場面において普遍的聴衆がどのような役割を果たすのかを明らかにしようとするものである。

Eubanksによれば、普遍的聴衆とは、道徳、社会 - 政治領域において理に適った判断を下す際の基準としての普遍化原理を体現したものに他ならない。すなわち、ペレルマンの「新しいレトリック」が解明しようとする「議論の論理の本質的な機能は、相容れない意見間の対

立に対し、満足いく解決を与えることにある」(Eubanks 1986: 72)。理に適った価値判断を下す際の基準が、特定の価値を超えて一般化可能なものをよとする普遍化原理である。ペレルマンの「新しいレトリック」においては、この「普遍化原理こそ、理に適っていることにとって不可欠なもの」(Eubanks 1986: 70) であり、この原理を体現しているのが普遍的聴衆である。特定の人々の集まりではなく、理性を備えたあらゆる人々からなる普遍的聴衆概念を設定することにより、「ペレルマンは、大胆かつ新しい言説の倫理的基準を提供」(Eubanks 1986: 81) している。

(i)、(ii) の立場ともに「普遍」の位置づけは異なるが、実はある一点において共通している。つまり両者ともに普遍的聴衆を〈基準〉として見なしているということである。(i) の立場においては、哲学者の言明を他の言明から区別する際の〈基準〉としての普遍的聴衆は、合理主義的思考の残滓として批判される。しかし(ii) の立場においては、実践領域における理に適った判断を下す際の〈基準〉である普遍化原理を体現したものとして評価される。(i) の立場からすれば、「(ii) の立場は、実践領域に形式的基準を外から課している」と批判されるだろうし、(ii) の立場からすれば「(i) の立場は、ペレルマンの実践理性に関する問題意識を見逃している」と批判されるだろう。しかし、両者ともに、普遍的聴衆を〈基準〉として見なす点では同じである。

このような普遍的聴衆を〈基準〉として捉えるアプローチは、普遍的聴衆の特徴(d)に焦点をあてた解釈といえるだろう。つまり、普遍的聴衆が含意する普遍化可能性が、哲学的議論とその他の議論、もしくは社会 - 政治領域における議論の適否や優劣など、を判定する〈基準〉

であると想定しているのである。

しかし、このような解釈を普遍的聴衆に関する唯一の解釈と見なすのは性急にすぎる。本稿では、普遍的聴衆が有する社会学的特徴、すなわち特徴 (b) に見られる普遍的聴衆の文脈依存性に焦点を当てた解釈を試みる。言い換えれば、ペレルマンの想定する社会観を明らかにし、それとの関連で普遍的聴衆を理解するのである。結論から先に言えば、普遍的聴衆とは、〈基準〉ではなく、諸価値が競合する領域において、理に適った判断を下すための議論の〈作法〉として解釈することができる。

3-3 多元的社会における議論の作法

「あらゆるレトリック理論は人間行動に関する先入見に依存している」(Gross and Dearin 2003: 13)。ペレルマンの「新しいレトリック」も例外ではない。ペレルマンが想定するのは、「多元論 pluralism」的社会観である。

このような社会観は、当然普遍的聴衆の概念構成にも反映されており、それが最も顕著に現れているのが、上述の特徴 (b)、すなわち普遍的聴衆の文脈依存性という主張である。「普遍的聴衆の概念は、神すなわち普遍で永遠の真理に関する言説ではなく、人間に関する言説であり、よって必然的に、その状況における理解、欲望、問題などにより条件づけられている。ゆえに、哲学においては、異論の余地のない真理など存在しない多元論が不可避である」(Perelman 1984: 193-4)。

ペレルマンは、その多元論的社会観を、彼の師である社会学者デュプレエルから引き継いだ²⁵。ベルギーの社会学者デュプレエル (Eugène Dupréel 1879-1967) は、「社会集団は諸価値の共有から生じ、道徳規範は社会がある行為を評価する方法を反映する」(Gross and Dearin

2003: 1) と主張し、その著書『Le pluralisme sociologique』(1945) や『Traité de morale』(1967) において社会学的多元論を展開した人物である。

デュプレエルによれば、お互いの存在や活動が、相手の行為や心理状態に影響を及ぼす場合、二人の個人の間には社会関係が存在し、このような相互作用的社会関係に従って諸個人の集まりは、集団もしくは社会として認識される。よって個人は、時には協力し、時には対立しあう幾つかの集団に、同時に所属することになる。ある問題をめぐって個人が所属する集団が対立する場合、両者の意見を比較し、より高次の観点から判断を下すことを迫られる。このような対立が個人に強いる選択が、個人に自立性や自由、自己意識をもたらすのである (Perelman [1977] 1979: 64-65)²⁶。

このようなデュプレエルの社会学的多元論に基づき、ペレルマンは次のように主張する。「社会生活は、協力への努力だけではなく、相手を支配し、ハイアラーキーを打ちたて、時には殲滅しようとする個人または集団間の対立からも成り立っている」(Perelman [1977] 1979: 66)。社会生活は基本的に価値対立から成り立っている。このような社会認識に基づくならば、あらゆる対立を、唯一の真理を提示することで解決しようとする一元論は批判される。なぜなら、一元論は、あらゆる意見を唯一の真理に還元しようとする傾向をもち、それに抵抗する者にたいして、暴力の行使に訴える場合があるからである²⁷。

よって両立し得ない価値の存在を受け入れるならば、必要なことは、その対立を唯一の価値によって解消することではなく、「絶えざる対話や対立する意見の比較によって生み出される理に適った (reasonable) 妥協である」(Perelman

[1977] 1979: 67)。そして人々が行う選択や決断は、論証ではなく議論によって構成されるとペレルマンは考える。

論証 (demonstration) とは、数学や論理学などで用いられる推論形式であり、真なる前提から出発し、一定の手続きに従って、必然的に正しい結論を導くというものである。これに対し議論 (argumentation) とは、同意を獲得するために、聴衆が抱く蓋然的前提と語り手の主張を結びつけることである。「説得的に語るためには、聴衆に適合しなければならない。説得力は聴衆が承認していることから導き出される」(Perelman [1977] 1979: 69) ²⁸。

議論を通じて得られるのは永遠不変の真理や知識ではなく、批判や改定の余地を有する、一時的に受け入れられた真理や知識である。なぜなら、議論における聴衆が抱く前提と語り手の主張の結びつきには様々なバリエーションが存在するからである。この議論のバリエーションを分析したのがアリストテレスの『弁論術』、『トピカ』であり、これらを参考にして生み出された、人々が「理に適った」議論を行うための議論法の一般理論こそ、ペレルマンらの「新しいレトリック」に他ならない。

要するに、デュブレエルの多元論的社会観を引き継ぐペレルマンは、社会は「神々の闘争」が常態であることを承認する。そして異なる価値観の対立は、永遠不変の真理への還元によってではなく、人々による「理に適った」議論によって解決されなければならないと考える。「議論は、異なる意見を排除することなく解決を提供する」(Perelman 1984: 191) ものでなければならない。

他者の意見に対する寛容な態度をもたらす契機となるのが普遍的聴衆である。なぜならペレルマンにとって「普遍的」価値とは、異なる価

値観を有する人々が行う議論において、人々がそれぞれ自らの特殊性を反省するための手段として位置づけられているからである。そして、このような普遍的価値に関する考え方も、デュブレエルに由来している。

普遍的価値はデュブレエルにとって説得の道具以上のものではない。それは「加工素材からすっかり切り離すことのできる精神的な一種の道具であって、使用に先立って存在し、使用後も損傷がなく、まったくもとのまま他に使用されえる道具である」。

普遍的価値は議論において重要な役割を果たす。普遍的価値を利用することによって、特定集団の合意の基礎にある特殊価値を、普遍的価値の限定された様相として扱うことが可能になる。特殊価値を超越した普遍的価値の枠内にかように特殊価値をはめこもうとすることは、人びとが特殊な合意の立場を超えることを熱望していること、価値の普遍化の重要性を認識していること、また、普遍的聴衆の合意に意味を与えていることを証拠立てている。(Perelman 1977=1980: 54)

よってペレルマンが想定する多元論的社会の観点からすれば、普遍的聴衆の役割とは以下のようにまとめることができるだろう。

ペレルマンは、現実社会は諸価値が競合していると考える。そして議論とは、異なる意見を抑圧することなく対立を解決するための試みに他ならない ²⁹。その議論において、普遍的聴衆が有する意味は、主張を判断する〈基準〉ではなく、むしろ差異を保持しつつ、対話を行うための〈作法〉である。つまり、各人がそれぞれ普遍的聴衆を構想することで、自身の特殊性が反省され、他者への寛容が促される。普遍的聴

衆とは、「普遍的なるもの」へ差異を解消するものではなく、差異を受け入れながら共存するための〈作法〉である³⁰。

普遍的聴衆の概念を設定することにより、互いに自らの領域に固執することなく、相手を尊重し対話を行う回路が開かれる。このとき哲学者の役割とは、差異を解消する普遍的真理を主張することではない。「永遠の真理を課そうとする代わりに、多元主義哲学者はより穏当な主張を行う。つまり、彼は自身にとって理に適っていると思われる、すなわち、そのようなものとして普遍的聴衆の同意を獲得できるような世界観を提示することで満足する。それは対話を通じて改善されるが、終わりのない試みである」(Perelman [1977] 1979: 70-1)。

ペレルマンの社会観をふまえるならば、普遍的聴衆とは〈基準〉ではなく、多元論的社会における、望ましい議論を行うための〈作法〉としての意味を持つといえるだろう。議論する際、人々は普遍的聴衆を構想することにより、自らの特殊性が自覚され、他者への寛容、さらには他者の意見の取り入れが可能になる。このように普遍的聴衆とは、多様な価値観をもつ人々が行う議論において、反省を促し、人々の間に関係を構築するための〈作法〉として機能するのである。

4 結論

本稿の目的は、ペレルマンの「新しいレトリック」の意義を明らかにすることであった。そのために、聴衆論の変遷におけるペレルマンの位置づけを確認し、重要概念である普遍的聴衆を、ペレルマンが有する社会観を通して理解することを試みた。その結果、普遍的聴衆は、多元論的社会における議論の〈作法〉としての側

面を有することが確認できた。

このような知見は、「文彩・論法」研究の系譜にペレルマンを位置づけようとする既存の社会学におけるレトリック分析の立場からは、得られないものである。

では、普遍的聴衆を〈作法〉として解釈することにより、どのような他の社会学理論との関連を論じる可能性が開かれたのか。最後に、このことについて述べて、本稿を終える。

ペレルマンが、自身のレトリック的視点は「語用論が意味論に対して優位を占めているロレンツェン、アーペル、ハーバーマスらなどのドイツの論理学者や哲学者が抱く考えに近い」(Perelman [1974] 1979: 89) と述べていることもあり、既存研究においてペレルマンの普遍的聴衆は、ハーバーマスの議論と結び付けられてきた。

例えば、Brockriede (1986) は、ペレルマンの普遍的聴衆を議論の適否を判定する〈基準〉として捉える立場に基づいた上で、ハーバーマスとペレルマン「両者ともに普遍性に駆り立てられているという点で、かなり類似している」(Brockriede 1986: 62) と主張する。

つまり、「真なる言明と偽なる言明とを区別するために、私は他の人々の判断を引き合いに出す——しかも私といつか会話しうるのであろうような他のすべての人々の判断を、引き合いにだすのである。(この場合私は、私の生涯が人間世界の歴史と同じ広がりを持っているとしたときに、私が見出し得るであろうすべての対話の相手を、反事実的に含ませることにする。)言明の真理条件は、他のすべての人々の潜在的な同意である」(Habermas 1971=1987: 150) として、普遍的な同意を真理の条件と考えるハーバーマスと、真理は、特定の個人や集団を超越した、理性を備えた人々からなる普遍的聴衆

の同意を獲得したものであると考えるペレルマンとの間に類似性を見出すのである。

確かに、普遍的聴衆を〈基準〉とするなら、ハーバーマスとの類似性が考えられるが、本稿のように〈作法〉と捉えるならば、むしろ両者の違いが明らかになる³¹。理想的発話状況——「すべての可能な参加者に対して、発話行為を選択し行使するチャンスが対称的に配分されている」(Habermas 1971=1987: 165) 状況——などの概念より、真の合意と偽の合意を区別するための〈基準〉を模索し、普遍性を言明の真理条件と考えるハーバーマスに対し、ペレルマンの普遍的聴衆とは、諸価値が対立する状況下において人々が、互いに相手を尊重しつつ議論を行うための〈作法〉について言及したものなのである。

このように普遍的聴衆を、議論の〈作法〉として解釈し、自身の特殊性への反省や、他者の意見の取り入れ、人々の間に関係を構築する契機の提供、といった機能に着目した場合、ペレルマンの普遍的聴衆は、G・H・ミードの「一般化された他者」やR・H・ブラウンの「アイロニ的態度」などの概念と類似性を持つといえる。

ミードの「一般化された他者」とは、「個人及び他者がすべて含まれる社会的ないし集団的行動の一般的で体系的類型」(Mead 1934=1995: 196) である。すなわち、自身もそこに含まれる社会活動において、他者が行う様々な振る舞いや態度を組織化したものが「一般化された他者」であり、それは自己や他者の振る舞いや態度を理解するための枠組として機能する。「一般化された他者」を取得することにより、一連の活動の中に自己を位置づける反省的まなざしがもたらされる。つまり、ミードによれば、このような「一般化された他者」を

取得することが、自我の形成において重要な役割を果たすのである³²。

ペレルマンの普遍的聴衆も、議論の参加者の人格形成にとって重要な役割を果たすといえる。なぜなら、議論において人々は普遍的聴衆を構想することにより、自身の立場を特殊なものとして反省し、他者の視点を取り入れる契機が生まれるからである。Brockriedeによれば、議論において、自身の立場に固執し、議論を拒否することは停滞の危険を伴い、いつもと違う遣り方で決定を下すことは、普段とは違った自己を提示することである (Brockriede 1986: 56)。よって、議論とは、判断や決断がなされる問題解決の過程であると同時に、参加者の人格が変容する過程でもありうる³³。

さらに普遍的聴衆は、反省を促し、他者の意見を取り入れることで、議論の参加者の人格の変容を促すだけでなく、人々との間に連帯を打ち立てる契機にもなる。つまり、議論において普遍的聴衆を構想することは、社会学者R・H・ブラウンのいう「アイロニ的態度」をとることなのである。

ブラウンは、ペレルマンのレトリック論を参考にしつつ (もちろんその他のレトリック研究を参照しているが)、公共空間において理に適った判断を下すための賢慮の基盤となるような共同体の再生を目指す³⁴。すなわち「多様な文化的状況下では、その賢慮の基盤となる知的伝統や議論領域が衰退し、代わりに科学のような倫理的に中立的な言語がコミュニケーションに採用される。その結果、社会や政治の問題について適切な判断を下すことが難しくなる。ブラウンは社会科学のレトリック分析を通じて、賢慮の基盤となる共同体の再生を目指すのである」(氏川 2005: 38)。

賢慮の基盤たる共同体を再生する際、重要な

役割を果たすのが「アイロニー的態度」である。アイロニー的態度とは、自身の立場を妄信せず、その偶然性、可謬性を自覚し、常に他により良いものがないか問い続ける態度を指す（氏川 2005: 39）。すなわち、自己の特殊性を反省し、他の意見へと開かれた態度である。このアイロニー的態度により、議論に参加している人々の間に連帯が打ち立てられ、そこでの議論の蓄積が賢慮の基盤となる。

ペレルマンの普遍的聴衆も、諸価値が競合する状況下で議論する際に、人々がそれを構想することにより、自身の特殊性が反省され、他者への寛容が促されるという点で、連帯の契機となるアイロニー的態度と同様の働きをするといえよう。

まとめると、普遍的聴衆を議論の〈作法〉として捉える本稿の立場からは、普遍的聴衆は、ハーバーマスよりも、むしろミードやブラウンの議論と類似性を持つ。これらの論者との関連を検討することを通じて、議論における普遍的聴衆の働きは、より一層明確になる。つまり、普遍的聴衆は、議論の参加者の人格を変容させ、人々の間に連帯を打ち立てる契機として働くのである。

注

¹ アメリカのスピーチ・コミュニケーション協会は 1914 年に設立され、機関誌 *Quarterly Journal of Speech* では、大統領演説、社会運動（中絶、人種差別）、歴史記述、映画・広告、文芸作品などを素材としたレトリックの研究が行われている。

また「探究のレトリック」に関しては氏川（2005）を参照されたい。

² ペレルマンに関するアンソロジーとしては次のものがある。スピーチ・コミュニケーション、法

学、政治学、哲学、人類学、社会学などの研究者が、それぞれの学問分野の観点からペレルマンについて論じた『Practical Reasoning in Human Affairs: Honor of Chaim Perelman』（1986）。代表的なペレルマンの論文とペレルマン論を収録した『The New Rhetoric of Chaim Perelman: Statement and Response』（1989）。最近のものでは、ペレルマンの議論を包括的に紹介した入門書『Chaim Perelman』（2003）が出版されている。

³ 社会学におけるレトリック分析に関しては、林原（2005）を参照されたい。

⁴ 例えば、Edmondson（1984）などは、ペレルマンの「新しいレトリック」を文彩・論拠研究の系譜に位置づけている。

⁵ ペレルマンの経歴に関しては『説得の論理学』（1977 = 1980）、『法律家の論理』（[1976] 1979=1986）の「まえがき」や「あとがき」に詳しい。

より詳細なペレルマンのライフヒストリーに関しては Gross and Dearin（2003）の第一章を参照のこと。ペレルマンの一人娘である Noémi Perelman Mattis の証言などにより、大戦中のナチスに対するレジスタンスへの参加、戦後のイスラエルの大学人やアメリカのスピーチコミュニケーション研究者らとの交流、さらにはオルブレクツ＝テュテカ夫人（後述）との出会いなどが描かれている。圧倒的な「暴力」の経験が、彼を「正義」、「自由」の考察へと向かわせ、さらには、それらの価値をめぐる対話の論理としての「レトリック」と出会う過程について知ることができる。

⁶ 小畑（1983a, 1983b, 1983c）、江口（1995）などを参照されたい。

⁷ ペレルマンの共同研究者として、その名を留めるのみのオルブレクツ＝テュテカ夫人であるが、実は『新しいレトリック』（1958）の作成に多大な貢献を果たした人物である。

Lucie Tyteca は 1899 年にベルギーに生まれた。

彼女の父親は著名な精神科医で、テュテカ神経精神医学協会の設立者である。ブリュッセル自由大学に進学、そこで経済学、心理学、統計調査法を学び、1925年に社会科学と経済学の学位を得ている。同年、彼女より7歳年上の、ブリュッセルビジネススクールの統計学の教授 Raymond Olbrechts と結婚。当時の一般的なベルギー人女性同様、学問の道には進まなかった。

結婚はしたものの夫婦の関係はうまくいかなかったようである。子供もなく、夫は仕事に熱中していたので、彼女は孤独であった。そして生活のほとんどを読書に費やし、時々知識人の私的な研究会に参加していた。

1948年、ペレルマンの研究会に参加し、彼の価値判断の論理学の構想に関心を持ったオルブレクツ＝テュテカ夫人は、彼との共同研究に着手する。『新しいレトリック』に用例として収録された様々な種類の言論は、彼女の読書カードに依拠するものが大半を占め、そして何よりも、大学で経済学や統計を学んだ彼女の社会科学的思想は、議論の社会的性質を考察する上で、法哲学者ペレルマンを大いに助けた。

ペレルマンが、形式論理と擬似論理、合理性 (rational) と理に適ったこと (reasonable) の区別といった理論的枠組みを担当したのに対し、オルブレクツ＝テュテカ夫人は、フランス、ドイツ文学の知識をもとに、文体や構成が議論において果たす役割を論じ、社会学に基づいて、価値の組、ヒエラルキー、分割などの、議論における価値の使用に関する詳細な研究を行った。

1988年、彼女は謎の死を遂げる。ペレルマンの娘 Noëmi Perelman Mattis によれば、死の前年、世話人に田舎に連れて行かれたまま、消息を絶ったそうである。

ペレルマンとオルブレクツ＝テュテカの学問上の友情は、ペレルマンが心臓発作によりこの世を去る

まで続いた。「マダム」、「ムッシュ」と呼び合う関係性の中に、お互いに相手を学問上の師として尊敬する態度が表されているといえよう。

ペレルマンの墓碑には旧約聖書申命記の一節が刻まれている。「正義。汝が追い求めるであろう正義」(Foss et al 2002: 84; Gross and Dearin 2003: 1-12)。

⁸ 小畑正剛 (1983a, 1983b, 1983c) は、ペレルマンの正義論とレトリック論の関係について論じ、現代の法哲学・法理論に対する意義を論じている。瀬川 (1985) も、ペレルマンの「議論の構造分析」に焦点を当て、民法解釈学に対する意義を検討している。

また中山 (2000) は、Th. フィーヴェクのトピック論や R. アレクシーの「実践的討議の理論」などにより展開されている、法的推論構造の解明を目的とする法的議論の理論のなかにペレルマンの「新しいレトリック」理論を位置づけている。

⁹ 「フォーラム Forum」とは「言語活動のための物質的な場所である。つまり、ジャーナル、会議、企業、企業内の部署などである。フォーラムは、その成員に明確な語り方・書き方を提供し、成員はこれらの語り方・書き方によって定義される。フォーラムは、調査や議論に適した対象が何であるか、いかなる機能がこれらに働いているのか、何が『証拠』、『妥当性』とされるのか、いかなる公的慣習があるのか、などに関する想定を共有している。フォーラムは、安定したエートスをもち、競合する派閥、曖昧な境界をもつ」(Porter 1992: 107)。

¹⁰ 1960年以降、レトリック論に限らず、映画、演劇、テレビ、ラジオなどを扱うメディア論、広告、ジャーナリズム、世論、投票行動を扱う研究分野 (マスコミ研究、政治経済学など)、さらには近年のカルチュラルスタディーズにおけるオーディエンス研究などにおいて、「聴衆」の役割に関する見直しが生じた。この「聴衆」の復権の背後には、それまでの語り手・書き手中心のコミュニケーションモデルに

に対する異議申し立てが存在している。

¹¹ Porter は、ミシガン州立大学の作文・レトリック・アメリカ文化学部の教授である。

¹² Porter が採用しているのはフーコーの「考古学的分析」である。考古学的分析とは、Porter によれば、次のような一連の問いに答えてゆくことである。「その言葉を使ったのは誰か、いかなる文脈で使われたのか、どのように分類されたのか、それにいかなる価値が付与されたのか、いかなるイデオロギーがまわりついていたのか、いかなる説が主張されたり、却下されたりしたのか」(Porter 1992: 9)。これにより「聴衆概念を支え、制限するレトリック論における認識論的前提が明らかにされるのである」(Porter 1992: 10)。

¹³ よって『弁論術』第二巻は、人々の感情、さらには年齢と財産(階層)に応じた性格類型に関して考察を加えている。もっとも考察の対象は成人男性に限定されているが。

¹⁴ 公の場における聴衆の説得の際に用いられるレトリックに対し、アリストテレスは、知識を持った人同士の真実の探究を目的としたディアレクティック(dialectic)を区別する。「この領域〔ディアレクティック〕は蓋然的なるものを問題とし(たとえば最善の政治体制は何か、など)、そこで用いられる方法は、相反する見解の突合せと総合である」(Reboul 1990=2000: 23)。

¹⁵ キャンベルが挙げる聴衆の心理状態とは、理解(understanding)、想像(imagination)、情熱(passion)、意志(will)であり、これらは語る目的、情報伝達、喜ばせること、感動させること、説得すること、に対応している。

彼はこれらの聴衆の心理状態の類型と、特定の文体を結びつける。例えば、情報伝達を目的とした場合、聴衆の理解に訴えるのは、明証性、わかり易い文体(perspicuity)であり、喜ばせる場合、聴衆の想像は、生き生きとした、具体的な文体(vivacity)

により刺激される(Porter 1992: 33)。

¹⁶ 聴衆を文体へと還元するキャンベルのアプローチへの批判として1960～70年代にかけて登場した、文体の習得よりも作者の心を描き出すことを優先させるロマン主義的アプローチ(Ken Macrorie、James Miller、Peter Elbow などのExpressivist Rhetoricと呼ばれる)も聴衆の衰退に関係している。この立場は「著者のもっとも大切な聴衆は自分自身であり、著者の『純粹で』、『本当の』声を描き出すことを通じて、よい文章が生まれる」(Porter 1992: 38)と考える。

¹⁷ アメリカにおけるフィッシュの読者反応批評は、ドイツにおけるヤウス、イーザーの受容理論と並んで、作品の自立性を強調するニュー・クリティシズムに対し、1970年代頃に登場した、読者の読みが作品の意味を生み出すとする立場である。

読者の「読む」というテキストへの積極的な係わりが意味を生み出すと主張する読者反応批評は、あらゆる読みが有効であるとは考えない。読者反応批評が想定する読者とは、ある一定の資格を有した存在である。フィッシュは、読者の読みは一定の解釈戦略に従っており、これらの戦略を共有した集団を「解釈共同体」と呼ぶ(土田・神郡・伊藤1996)。

¹⁸ 「受け手→共同体」という聴衆論の転換は、コミュニケーション形態の転換であると同時に、レトリックを伝達的手段ではなく認識の方法として捉える転換でもあったといえる。

人々は議論においてレトリックを通じて現実を構成するという立場は「認識としてのレトリック Rhetoric as Epistemic」と呼ばれており、Porter もこの立場を暗に踏まえつつ聴衆論の変遷に関する歴史記述を生み出していることを指摘しておこう。

¹⁹ この知識の社会的在庫は、経験的にはあるテーマに関する諸文書群として存在するかもしれないが、その文書群=知識の社会的在庫ではない。文書群は、共通の参照点を提供することで、人々を結

びつけるメディアの機能を果たし、そのような経験的リファレンスをもとに人々は各々知識の社会的在庫を形成する。知識の社会的在庫とは、このような人々の実践を捉えるための理論的装置であるといえよう。

²⁰ ペレルマンによれば、「实在」に関するものは、疑いを免れており、議論の対象とならない。それゆえ合意の有無だけが問題になる。「事実」とは、具体的なデータに関するものであり、「真理」とは諸事実が結合した複雑なシステムである（例えば、科学理論や、哲学的、宗教的真理など）。「推定」は、経験則である（よって事実によって反証または強化される場合がある）。

「好き嫌い」は、言明に重み付けを与えることで上下関係を設定する。同意には程度の差があり、強弱が問題になる。「価値」とは、その後の「行動を指示する」（Perelman 1977=1980: 45）役割を果たすものであり、「優劣順位」は諸価値間に序列を設定する。価値、優劣順位はともに、「選考論拠」すなわち「トポス」と呼ばれる一般原理により支えられる。トポスの例としては、「多いものは少ないものよりもよい」（量のトポス）、「希少なものはありふれたものよりもよい」（質のトポス）などがある（Perelman 1977=1980: 46-61; 瀬川 1985: 5-16; Foss et al 2002: 90-4）。

²¹ 「ある分野における知識は、単なる名詞として表現されることは決してない。知識は、共同体全体の同意を獲得している価値言明とともに構成され（例えば、『すべての人間は平等に創られた』）、共同体間の論争のためのトピックを提供する（例えば、『中絶は不道德だ』）。共同体に貢献しようとする語り手は、対象領域内ですでに確立した知識を学習し、理解する必要がある。言説共同体内で、どのような言明が『争点』であるのかを学習し、意見の対立がどこに存在するのかを発見しなければならない」（Porter 1992: 113）。

²² 「議論における社会的文脈」（Perelman [1959] 1963）と題される小論からの引用。社会学者に向けられたものであるということを割り引いても、「新しいレトリック」が有する知識社会学的側面への言及は、レトリックと社会学の関連を考える上で重要である。

²³ 説得と確証の区別は「話し手の言葉を実際に聞く人の数による区別ではなく、話し手が同意を求めようとしている相手が、限られた数の人か、それとも理性を備える人のすべてか、という話し手の意向による区別である」（Perelman 1977=1980:42）。

²⁴ Golden (1986)によれば、普遍的聴衆概念は、アリストテレス、トマス・アクィナス、カント（特に「定言命法」）などの議論の影響を受けているとされる。「ペレルマンは自らの理論を西欧哲学の主流のなかに位置づけているのである」（Golden 1986: 289）。

²⁵ 先行研究のなかでペレルマンの「新しいレトリック」へのデュプレエルの影響に言及したものとしては、三輪(1982)、小畑(1983b)、Eubanks(1986)などがある。

²⁶ デュプレエルの説明およびペレルマンの社会観に関する記述は、ペレルマンが1977年にモントリオールのMcGill大で行った「多元論の哲学と新しいレトリック」と題する講義録に基づいている。この講義録はPerelman (1979)に再録されている。

²⁷ Fisherは、ペレルマンが前提とする多元論的社会に言及しつつ、彼の「新しいレトリック」は、自由で、開かれた多元論的社会を希求する政治的構想を伴っていることを指摘している（Fisher 1986: 88）。

²⁸ 論証と議論の区別に伴い、合理性概念も「合理的な rational」と「理に適った reasonable」とに区別される。前者は「対話や議論の必要のない、ア・プリオリに確実な数学的理性のための規準であり、

『話し手』—『聞き手』関係は捨象されている」。これに対して後者は『『不一致』が生じる可能性が常に存在する価値や規範に関わる実践理性のための規準である」(小畑 1983b: 80)。

²⁹ 議論を分析の際、ペレルマンは法律家の経験が参考になるという。「形式論理において数学が果たすのと同じ役割を、議論においては法律が果たす」(Perelman 1984: 195)。

³⁰ 例えば、Sculd ([1976] 1989) は、普遍的聴衆概念を、議論の内容をチェックしバランスをとるための道具と見なしている。「これこそ相対主義の時代において、ペレルマンのレトリックが有する道徳的意味である。彼は懐疑主義と狂信主義を拒絶し、保証や真実が存在しない、終わりなき議論の過程に参加することを求める」(Sculd [1976] 1989: 162)。

³¹ 小畑 (1983b) も、法哲学の観点から、両者の差異に関して詳細な検討を加えている。

³² 船津 (1995) は、ミードが想定していた社会観をふまえつつ、社会における諸対立の解決を「一般化された他者」への総合に求めていたことを指摘している。「ミードの生きた現実社会には人種や

階級などの対立が存在しており、ミードにおいては、個人や集団の間の対立が明確に意識されていた。……実際、ミードは人種対立や階級間の対立、そして国際間の対立も、このような『一般化された他者』の期待の形成と取得によって解決されると考えていた。自国の利害を主張するその過程において、すべての他の国の存在を認めるような態度をとるという『国際心』(international mindness)の必要性をミードは強く訴えていた(Mead, 1929)」(船津 1995: 54)。

これに対しペレルマンの普遍的聴衆は、対立の解決をもたらすものとして構想されてはいない。それは諸価値が対立する状況下において、人々が議論を行う際の〈作法〉である。

³³ この意味で議論は「実存的な existential」意味を持つ。「説得されるとは、説得する者が提示する意味的に異なった世界を生きることである」(Gross and Dearin 2003: 151)。

³⁴ 賢慮とは「社会・政治領域のような不確実な状況下において最適な行為をするための伝統的な知恵」(氏川 2005: 38)である。ブラウンに関しては氏川 (2005) を参照されたい。

文献

- Atkinson, P. 1990, *The Ethnographic Imagination*. London: Routledge.
- Berger, Peter L., and Thomas Luckman, 1967, *The Social Construction of Reality*, New York: Doubleday. (= 1977, 山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社。)
- Brockriede, Wayne, 1986, "Arguing: The Art of Being Human," James L. Golden and Joseph L. Pilotta eds., *Practical Reasoning in Human Affairs: Honor of Chaim Perelman*, Boston: Reidel, 53-67.
- Brown, Richard H. 1977, *A Poetic for Sociology: Toward a Logic of Discovery for the Human Sciences*, New York: Cambridge University Press.
- Dearin, Ray D. ed, 1989, *The New Rhetoric of Chaim Perelman: Statement and Response*, Lanham MD: University Press of America.
- Ede, Lisa S, 1981, "Rhetoric Versus Philosophy: The Role of Universal Audience in Chaim Perelman's *The New Rhetoric*," *The Central States Speech Journal*, 32: 118 - 125. Reprinted in: Ray D. Dearin ed., 1989,

- The New Rhetoric of Chaim Perelman: Statement and Response*, Lanham MD: University Press of America, 141 - 151.
- Edmondson, R. 1984, *Rhetoric in Sociology*, London: Macmillan.
- 江口三角, 1995, 「カイク・ペレルマンの正義論」『人文学報』京都大学人文科学研究所, 76: 19-39.
- Eubanks, Rhlph T., 1986, "An Axiological Analysis of Chaim Perelman's Theory of Practical Reasoning," James L. Golden and Joseph L. Pilotta eds., *Practical Reasoning in Human Affairs: Honor of Chaim Perelman*, Boston: Reidel, 69-84.
- Fisher, Walter R., 1986, "Judging the Quality of Audience and Narrative Rationality," James L. Golden and Joseph L. Pilotta eds., *Practical Reasoning in Human Affairs: Honor of Chaim Perelman*, Boston: Reidel, 85-103.
- Foss, Sonja K., Karen A. Foss and Robert Trapp, 2002, *Contemporary Perspectives on Rhetoric*, 3rd ed, Illinois: Waveland Press, Inc.
- 船津衛, 1995, 「『自我』の社会学」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座 現代社会学 第二巻 自我・主体・アイデンティティ』岩波書店, 45-68.
- Golden, James L., 1986, "The Universal Audience Revisited," James L. Golden and Joseph L. Pilotta eds., *Practical Reasoning in Human Affairs: Honor of Chaim Perelman*, Boston: Reidel, 287 - 304.
- , and Joseph L. Pilotta eds, 1986, *Practical Reasoning in Human Affairs: Honor of Chaim Perelman*, Boston: Reidel.
- Gross, Alan, and Ray D. Dearin, 2003, *Chaim Perelman*, Albany: State University of New York Press.
- Habermas, Jürgen and Niklas, Luhmann, 1971, *Theorie-Diskussion Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie: Was leistet die Systemforschung?*, Frankfurt: Suhrkamp. (= 1987, 佐藤嘉一・山口節郎・藤澤賢一郎訳『批判理論と社会システム理論』木鐸社.)
- 林原玲洋, 2005, 「論証と文彩——レトリック論のふたつの系譜と構築主義の社会学」『現代社会理論研究』15: 85-97.
- Mead, George H., 1934, *Mind, Self, and Society*, Charles W. Morris ed, Chicago: The University of Chicago Press.(= 1995, 河村望訳『精神・自我・社会』人間の科学社.)
- 三輪正, 1974, 「ペレルマンの『新しいレトリック』の哲学」『理想』499: 25-33.
- , 1982, 「哲学とレトリック——ペレルマンのレトリック論を中心に」『理想』595: 32-44.
- 中山竜一, 2000, 『二十世紀の法思想』岩波書店.
- 小畑清剛, 1983a, 「レトリックと法・正義 (一) —— Ch. ペレルマンの法哲学研究」『法学論叢』112 (6) : 51-73.
- , 1983b, 「レトリックと法・正義 (二) —— Ch. ペレルマンの法哲学研究」『法学論叢』113 (4) : 70-103.
- , 1983c, 「レトリックと法・正義 (三)・完 —— Ch. ペレルマンの法哲学研究」『法学論叢』113 (6) : 24-59.
- , 1994, 『レトリックの相克——合意の強制から不合意の共生へ』昭和堂.

- Perelman, Chaïm, 1963, *The Idea of Justice and the Problem of Argument*, John Petrie trans, New York: Humanities.
- , [1976] 1979, *Logique juridique: Nouvelle Rhétorique*, 2nd ed., Paris: Dalloz. (= 1986, 江口三角訳『法律家の論理——新しいレトリック』木鐸社.)
- , 1977, *L'empire rhétorique*, Paris: Vrin. (= 1980, 三輪正訳『説得の論理学——新しいレトリック』理想社.)
- , 1979, *The New Rhetoric and the Humanities: Essays on Rhetoric and Its Applications*, William Kuback trans, Boston: Reidel.
- , 1984, "The New Rhetoric and The Rhetoricians: Remembrances and Comment," *Quarterly Journal of Speech*, 70: 188-96.
- Porter, James, 1992, *Audience and Rhetoric: An Archaeological Composition of the Discourse Community*, Englewood Cliffs NJ: Prentice Hall.
- Ray, John W., 1978, "Perelman' s Universal Audience," *Quarterly Journal of Speech*, 64: 361-75.
- Reboul, Oliver, 1990, *La rhétorique*, Paris: P.U.F. (= 2000, 佐藤泰雄訳『レトリック』白水社.)
- Scult, Allen, 1976, "Perelman' s Universal Audience: One Perspective," *The Central States Speech Journal*, 27: 176 - 180. Reprinted in: Ray D. Dearin ed., 1989, *The New Rhetoric of Chaïm Perelman: Statement and Response*, Lanham MD: University Press of America, 153 - 162.
- 瀬川信久, 1985, 「Ch. ・ペレルマン『議論の研究 (Traité de l' argumentation)』——実用法学の視点からの検討」『日仏法学』13: 1-52.
- 氏川雅典, 2005, 「R・H・ブラウンのレトリック論」『ソシロゴス』29: 35-51.
- 土田知則・神郡悦子・伊藤直哉, 1996, 『現代文学理論——テキスト・読み・世界』新曜社.

(うじかわ まさのり、東京大学大学院、fwjg5317@mb.infoweb.ne.jp)
(査読者 瀬田宏治郎、明戸隆浩)

Perelman's Theory of Rhetoric The Review of "Universal Audience"

Ujikawa Masanori

Perelman' s "A New Rhetoric" had a big influence on rhetorical analyses in social sciences. But it is not necessarily recognized enough what meaning Perelman' s theory of rhetoric has for sociology. The purpose of this thesis is to clarify the significance of "Universal Audience" that characterizes Perelman' s "A New Rhetoric." Through getting a grasp of the view of society Perelman assumed, it becomes clear that "Universal Audience" has the aspect as methods of argument in pluralistic society. As a result, it turns out that Perelman' s "Universal Audience" is similar to G. H. Mead' s "Generalized Other" and R. H. Brown' s "Ironical Attitude" .